

柿



大
觀



吳山樓隨筆集

柿

大宮伍三郎著

昭和三十三年九月二十一日發行

私家版一、一〇〇部 非売品

柿

吳山樓隨筆集

著者 大宮 吳山樓

鎌倉市扇ヶ谷五九〇

發行者 大宮 真琴

東京都千代田区神田猿樂町一丁目七

印刷者 神谷 瓦人

東京都文京区久堅町七四

原色版 山川 忠平

目次

表紙繪 横山大觀

柿 吳山樓隨筆集

目次

後悔

2

旅

春雪

8

那智滝

12

瀨 峽

16

矢の川峠	20
長良川の鵜飼	24
太古の村	28
山のホテル	32
茶	
初釜の寒菊	38
紅梅	42
良寛と華岳の茶	46
高野山の朝茶	50
一期一會	54

かえり花	58
印花壺	63
菅田庵	66
如庵	70
春雨庵	74
柳瀬山莊	78
樂	
楽三会	86
おしどり	92
鎌倉の梅	95

清樂土日	100
老友	104
簡素	108
緣切寺	112
柿紅葉	116
梅香清樂	120
美	
萬曆赤繪	124
新織部	127
天心処	132

青邨古稀展	136
常盤山文庫の秋	141
人	
追憶の會	146
都ホテル	151
芝生	154
正力傳の感激	160
特殊指定	164
世	
恩人	170

新聞社とのわかれ

174

回顧

上京までの兄

織田定助

187

名古屋新聞と大宮さん

増田録郎

194

戦後十二年の先生

千々松清

206

家庭の父

大宮真琴

216

後悔

後 悔

三十年も昔のこと、文芸春秋のメンバーを迎えて、講演会を開いた。東京支社長であった若い私は、有名文士達のおともをして、東海道の各都市をまわった。ふり出しの静岡では、浮月という、大きな池をかこんで座敷がたちならんでいた料亭で、豪華な宴会を、私は主催した。そのころは、広告主を招待して、しょっちゅう宴会を催していたから、どんなぜいたくな遊びをやられても驚かなかったが、文士達の遊びの、品のわるいには、目をそばだてた。そのときのメンバーは、菊池寛、大仏次郎、横光利一、小島政二郎、佐々木茂策などであった。

旅行がつづいた或る夜、誰だったか忘れたが、色紙をもちこんで、記念に揮毫を頼んだ。私にも一枚くれた。

「われ 事に於て 後悔せず 菊池寛」と書いたものを貰った。

「これは、ねえ、宮本武蔵の言葉だよ」といった。字は、おせじにも上手とはいえない。ただ遠慮会釈もなく、グングン書きまくった字だ。

そののち、巧芸社の大塚君に乞われて、その色紙を進呈した。ところどころの、美食が看板の食べもので、同じ色紙をよく見るようになったのは、それを巧芸版に仕立てたものであろう。大塚君も今は故人となった。

○

じらい、三十年にちかく、私はこの語を、ときどき、ころのなかで、くりかえした。剣の道で、無双の達人である武蔵は、芸術の世界でも、達人である。細川家からいま長尾美術館に伝わる「もずの絵」を一見しただけで、だれにもわかることである。これは国宝となっている。

電通が、創立五十年の記念に出版した「五十人の新聞人」に、勝田重太郎君は「われに後悔なし」の一文を寄せた。勝田君は、むかし新愛知の東京支社長であった。それと同じ時代に、私は名古屋新聞の東京支社長をしていた。世間は、好んで二人を比較しては話題とした。恰好の話題となるに



ふさわしい活動を、二人は、したと思う。

職にあるときは、立場上、競争者ではあったが、職を離れば、よき友であり、よき師でさえある。おそらく、いちばんよき理解者だろう。「われに後悔なし」といい切れる同君の心境は、羨しい。

○

私は、それにひきかえ、事において、後悔することばかりだ。後悔、先に立たず。それも過去の人生観と性格から出ること。いたしかたもなしとは思うが。

人生は、一日一日が清書だ。書き換えはきかず、運命の歯車に、あともどりは無い。私の運命を決した公職追放の際にも、裏から手を打てと、忠告されたが、自己の身上に手をうつことを罪悪のように教えこまれた、若いころの先輩の教えは、本能のように、私のところに、しみこんでいた。そのために、何の顧慮もなく、審査委員諸氏に全幅の信頼を置いて、万事放置しておいた。そして、手もなく、ゼネラル・ホイットニーのサインのあるメモランダムを頂戴する破目となった。これは、占領下、至上命令である。

前の民主党代議士会で、袂別の演説をした。椎熊三郎君をはじめ、全員、眼頭をおさえ、私の運命を悲しんでくれた。「ふたたび諸君の麒麟に附して、国家のためにつくす時期のくるまで」など

といったが、世の中は、そんなにあまいものではない。解除になるまでの四年間に、座席はすべてふさがって、世の中はすっかりアメリカなみになり、自分たち戦前派は、時勢おくれとなってしまうた。

○

もう一つの後悔は、部下にたいして、愛するが故に文句をいう権利あり、と錯覚したことで、愛するが故に、才能と使命を認めるがゆえによけいに相手を鍛えた。鍛えるために叱言をいう。叱言をいうために、うらまれる。結局、愛情の鎚は、わが身にかえってくる打撃となる。私は叱言の多かった我を後悔する。

所詮、私は下根の生れ。われ、事に於て後悔することばかりだ。

(三一、三、三夜)

